

第56回 日文研フォーラム



## 和算と韓算を通して見た日韓文化比較

Comparative Study of Japanese and Korean Culture  
on the View of Traditional Mathematics



金 容 雲  
Kim Yong-Woon

---

国際日本文化研究センター



日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 梅原 猛



● テーマ ●

# 和算と韓算を通して見た日韓文化比較

Comparative Study of Japanese and Korean Culture  
on the View of Traditional Mathematics

● 発表者 ●

金 容 雲

漢陽大学教授

Dr. Kim Yong-Woon

Professor, Hanyang University, Korea



1993年9月14日

発表者紹介

金 容 雲

Kim Yong-Woon

漢陽大学教授

Professor, Hanyang University

- |             |                             |
|-------------|-----------------------------|
| 1927年       | 東京に出生                       |
| 1958年       | 朝鮮大学数学科卒                    |
| 1959年       | Auburn大学 (M.S.数学)           |
| 1967年       | Alberta大学 (Ph.D. 数学 (位相数学)) |
| 1967年～1969年 | Wisconsin 州立大学数学科助教授        |
| 1969年～現在    | 漢陽大学数学科教授                   |
| 1993年       | 国際日本文化研究センター客員教授            |

著 書：

「韓国数学史」、「カタストロフィの理論」、「空間の歴史」、  
「韓国人と日本人」、「鎖国の汎パラダイム」、「日韓民族の  
原型」、「比較科学史の地平」(共著)、「訪ずれる没落」、  
「日本の喜劇」、「東洋の科学と思想」など多数

賞：

韓国出版文化大賞、ソウル市文化賞

## 序

私はもともと数学者であり、数学とは世界中どこでも同じであるというように教育され、そう信じて来た。

いわゆるデカルト哲学で言う知性とは人類共通の普遍なものという考えである。しかし同じ教科書を以て始まった数学が国毎に違うことがありうることを数学史の研究を通じて痛感した。

勿論、伝統数学の枠組みでのことである。かつての鎖国のように互いの往来を極度に制限される状態の中では、民族毎に伝統文化の枠組の中で形成された独自の数学が存在し得るといえる。

ここでいう数学は特に各民族の合理精神の象徴としての精神的な構成物である。この違いは文化の諸相すべてについて同じ程度に表われる。

文化圏の名に値するものであれば、必ずそこには独自の科学、芸術、文学、宗教などの体系があり、異質の文化圏との間にはそれぞれの文化の諸相が対応する。例えば韓国と日本を例にとっていうならば、韓国の数学には日本の和算があり、文学、芸術、宗教など各々の文化の諸相は時間軸を中心に置いて相対応している。私はこのような異質な文化を生むものの核心には各文化圏、民族圏には独自の

原型(文化意志)があるためであり、それが時代の条件の中で各文化の分野を形成してゆくものと信じる。

民族の原型は民族がはじめて形成された時、祖先の平均的な体験を反映して形成された。丁度民族語が変わらないように、一旦形成された原型はその後の民族文化の核となつて各時代の文化を貫通してゆく。この事実を交響楽にたとえらるとわかり易い。原型は楽譜に相当し、各楽器の奏する楽音は異なるものの全体としては調和がある。文化の諸相の内容がその対象を夫々違つたものにしていても一時代の文化が調和するのと同じ理由による。第一、第二など各楽章は異なつてもそのモチーフは変わらない。各時代の文化は違つていても常に民族固有の性格すなわち原型が貫通するからだ。祖先の平均的な体験の中で最も多くの影響を与えたものは風土との係わり合いの中でなされたる、今日の多くの韓国人の中には故国を離れて異文化圏の中で生活を営んでゐるものもすくない。かれらは民族原型を維持しながらも、それをはじめて形成した風土との係わり合いを持ち合わせていない。それほど民族の原型は変わりにくいものである。このことは在米のユダヤ人についても言えることである。

在日韓国人の文化を考へることは在米ユダヤ人の文化は勿論、国際化しつつあ



る全世界の人々が当面する新しい文化の意味を考えさせるであろう。この事実は在米の日本人についても言えるであろう。

言語と民族性に深い関係がある。しかし一旦形成された民族語は変わらない。それと同じように民族形成の時期に備わった民族の原型、すなわち基本的文化意志は変わらない。時間的、空間的に離れていても同一民族としての共通性は存在する。原型が失われることは民族として存在しえない状態である(ことを意味する)。民族とは原型を共有する集合ともいえる。

風土とそれに対応して形成された基本的な社会構造と深い係わり合いをもって形成された原型が、それとの係わり合いが殆ど失われている都市や新しい科学技術の作り出す環境の中で自己のアイデンティティの核を維持させるのは如何なる理由によるものであろうか? このことは国際化が進展する中で今後の世界文化を考える上で大きな課題となろう。特に自然環境が急速に破壊されてゆく今日の状況下で民族原型、ひいては人類の原型の変質が問題になってくる。イデオロギーの終焉が叫ばれ、民族問題が世界的規模で拡散してゆく状況の中で、民族原型と文化あるいは風土と文化の課題を考えたい。

## 国によって数学すら異なる

私は韓国と日本の数学を比較しているうちに奇妙なことに気がついた。日本の和算も韓国の数学も共に中国の算学書を基本的な教科書として採択していた。日本には古いところでは養老令によってきめられている算学制度がある。当時大和朝廷で採択された算学の教科課程は唐のものというよりむしろ、一旦百済あるいは新羅で再編集されたものであったと推測される。この事実は新羅と大和の算学制度を比較するとすぐわかる。しかし一応体裁だけはととのっていたもののこのときの日本の算学制度はすぐに立ち消えになってしまった。そのためこの制度はそれほど大きな影響を後世にまで及ぼしていない。そこで比較の対象になるのは江戸時代の和算である。和算の種本となったものの中には秀吉の侵略戦争スベニアとして持ち帰ったものが多かった。当然、はじめの内は日本の数学者達も韓国のそれと共通した算術をやったと見てよい。それが百年くらいたつとまったく異質といつて良いくらい違う内容になってくる。

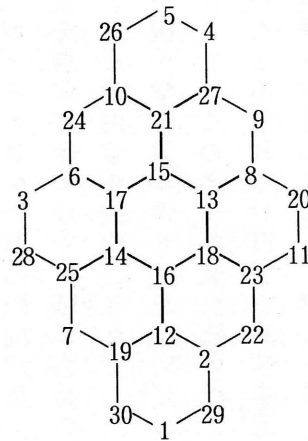
当時算書は算経と呼ばれもした。「経」という文字からも推察できるようにその内容は手軽に変えうる性質のものではない。特に韓国、特に朝鮮王朝時代の数学者の考え方にはそのような傾向があった。しかし、日本の算学者達はそんなこと

には一切お構いなく、むしろどんどんと美しく楽しいものに作り変えていった。元来いくらでも改良の余地があるのが数学であるというものの、日本の場合は、はじめからそうすることを是としていた。韓国算学者達にもそれなりの創造性はあったが、韓国人は何等かの思想的背景あるいは理由がないと創造できない。

この事実は日本の算学者の集団と朝鮮算学者のそれを比べるとすぐわかる。日本の算学者は関流、會田流など各流派を形成し各々その技を競い、算額などを神社、佛閣に掲げ新しい算技を競争した。

一方朝鮮算学者の中核は王朝制度に寄生した中人と呼ばれる技術官僚であり、時代が下ると共に世襲の傾向が強くなっている。官僚制と世襲は固定した標準教科書を遵守させてゆく、特に当時の儒学（朱子学）的教養を背景にした数学研究は一層その内容を硬化させた。

韓国の学者達が最も熱を注いだのが魔法陣の研究であった。朝鮮王朝の数学者にとつてはこのような魔法陣は数の調和であり、一種の哲学的な観念すらも伴っていたとみられる。日本の算学者達も魔法陣の研究はしている。しかしそれほど哲学的な関心はなく、むしろ遊び半分であり、特に三角形に内接する無限の円列に関する面積の総和の研究などにその創造性を發揮した。



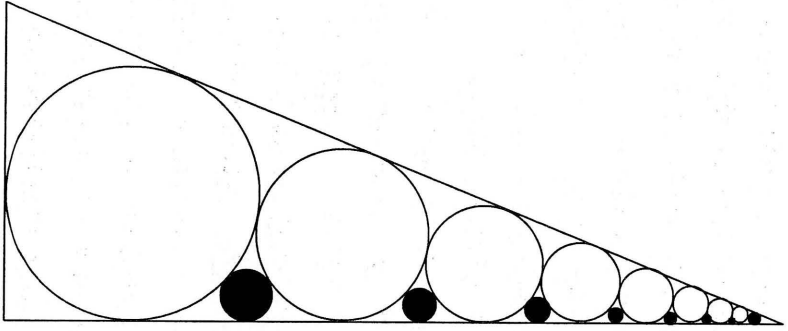
(A)

(A)は朝鮮の算学者が好んで研究した一種の魔法陣である

中国系の魔法陣とは元々河圖、洛書からはじまった。即ち1から一定の数までの数字を重複させることなく、又除外することなくならばその総和が一定の数を保つようにする。ここでは1から30迄の数をすべて重複させることなく使用

し各小六角形の数を93にしている。朝鮮算学者にとってはこれは単なる数の遊びではない。六角形の六は五行説の水に相当する。9個の小六角形を組合せながら一種の哲学的な法悦を感じていたと見える。ボエチウス(Boethius)が、スコラ哲学と数学を組合せながら寺院数学を楽しんだ事とその思想や方法において一種の共通性がある。ここでは朱子学と数の組合せとも言えよう。

(B)は日本の和算家が好んだ問題で、いくら狭い空間にでも円を書いてゆく。



今有如圓勺及內容逐円

只云初黒円経若干次黒

円経若干欲使容円歛至

多問得黒円経和術如何

答曰以次黒経減初黒

経余以除初黒経巾得

黒経和

(B)

このような考えに関しては、日本で最も有能な実業家といわれるソニーの会長盛田昭夫の主張するスキマ産業論がある。その内容はAとBの会社が一生懸命がんばっているところへそのまま飛び込んではいけない。むしろそれらの間にできるすき間をねえという。いくら大会社同士がせり合っているとしても、必ずその接点のできるところにはすき間がある。その中で一等になりなさいというすすめである。なんとこの考え方が日本的なのである、すなわち三角形に内接する無限の円の列のことを対象とする和算の考え方に共通している。これは、和算だけに限らず、日本人の人生観にもよく表われてくる。秀吉がもし、今日生まれたとすれば、至極有能なビジネスマンになったであろう。彼がその部下黒田如水から「いかにして、そのような地位にのぼったか」と聞かれたときに、「自分は何も先のことを考えなかった。ただ一つの仕事をしている間はその仕事をできるだけ忠実に勤めたばかりであった」と答えたという。やはりここにも日本人の空間観があるようだ。どんなところにも自分の力を發揮するに足る空間があるというものであり、それはまた一所懸命、あるいは一生懸命の思想に通じるものであろう。どこでもよい与えられた場所を、そのまま肯定してその中を掘り下げてゆくと、必ず一つの天地がひらけてくるというのだ。「針の穴から天井をのぞく」ことを考える民ならで

はの発想といえよう。

一方韓国の算学者の仕事には、和算に見られる狭いところをどんどんきわめていくという態度が見られない。特に三角形に内接する無限円列などは一切興味の対象にすらなれなかった。

### 《算盤》

日本最古の算盤といわれているもので、秀吉軍の前進基地である名護屋城にいた前田家の陣営で使われていたものがある。中国系のもので上段に二つの珠があり、下段に五つの珠がある。恐らくこれもまたその戦争中、朝鮮のどこかで得たものであろう。韓国ではそれと同じものをその後も改良することなく使っていたが、日本では一旦これが普及しはじめるとすぐに上段の二つの珠の中一つがなくなり、その後、下段の五個の中、一個も外され、結局上の珠は一つ、下の珠は四つということになってしまう。この改良の仕方は極めて現実的で長く算盤を使っているとは自然にそのようになってくる。

算盤はもともと五進法の原理から作られたものであり、韓国人はついぞこの原理の呪縛から離れることができなかったが、日本人はそんな原理にお構いなしに

使い易さだけを考えてどんだん珠を外して行った。

このことは創造性のあるなしとは関係のない価値観の問題であろう。私ははじめのうちはこの算盤の改良の原因を便宜さだけであったと考え、漠然と日本には商業が発達したためだろうと思っていた。西洋ではイタリアのベネチアの商人の例に見られるように計算器具と簿記は商業の発達に平行してなされている。

しかし韓国では複式簿記が、すでに高麗末一五世紀の初めの頃発明され実用化していた。その時期については多少の異論はあるが、朝鮮時代に使われたのは事実であり、その遺物もある。一方、日本に複式簿記が使われ始めたのは、福沢諭吉の紹介によるもので明治以降のことであった。

韓国の複式簿記は高麗の首都（開城）の商人が発明したといわれ「松都四介治簿法」と呼ばれている。松都とは開城の別名である。それが発明されたのは商人達の間であったから現実の必要があつたことだが、実用面だけが問題であつたとすれば、算盤の改良もできたはずだ。この発明には現実性もさることながら、むしろその背景には陰陽五行説的な思考があつたと指摘されている。（尹根鍋「松都四介治簿法」について）

具体的にはむしろ易学的な陰陽論による二進法的な論理の展開である。大極が



あつて陰陽に分裂し、それが四象、八卦という具合に展開してゆく。一つの取引きの過程をこういつた二分法に沿え考えてゆくとその記録が複式簿記のそれに一致するという。

### 和算発展の理由

中国系の数学の優れた面は方程式論にあらわれた。ギリシャ数学の特徴がユークリット幾何学にあつたのとは対照的であつた。それはいみじくも東洋的な不可知論、あるいは陰陽論とギリシャの存在論の対照性を具体的に反映しているといえよう。

特に中国の天元術は算木を利用した器械的代数学であつた。この内容は高次の数字係数方程式の解法でありヨーロッパでは一八一九年英国のホナー (Homer) によつてはじめて発表された。中国ではそれに先立つ事六百年にもなる。天元術を朝鮮、日本にそれを伝えたのは『算学啓蒙』であろうと推測されている。又『算学啓蒙』は天元術の算木の列べ方を圖によつて示めしている。朝鮮算学者はこの算木を最後まで固守した。一方日本の和算家達はすぐに算木をすて、それを直接用いることがなくなり『算学啓蒙』になぞつて圖をもつてえがきながら理解し、

その後それを記号化した。

こうした過程で、器械代数学か筆算代数、記号代数と発展していった。丁度算盤の珠を一つづつ失くしてゆくのと同じ発想法により算木を気軽に筆算に変えてゆくことによってその内容をより便利にし、新らしく記号代数にまで発展させたのだ。このような韓国人と日本人の数学研究の態度に一貫したパターンがあることがわかる。朝鮮算学者は原理、原則に忠実な正統主義者であり、日本の和算家は原理・原則に拘はらない現実主義の立場であった、といえよう。

「便利でさえあればすぐに変えてゆく」「多少便利であっても原則は変えることは出来ない、最後まで原則を守る。」

かかる態度は各自の原型に基づくものであり、容易に変えることが出来ず、各々の歴史展開の様相にまでも深く影響を与えて来た。

### カナの作り方

これらの例からみて、韓国人と日本人は合理的な思考においてですら別々の仕方であるらしいことがよくわかった。

よく「必要は発明の母」をいわれる。同じ必要という契機があっても、韓国人

と日本人の発明品は違うのだ。原型が違うのでまったく違ったものを生み出すという結論に達した。もう一つ例を考えてみたい。

日本語の文法構造は韓国語と全く一致する。しかし中国語とは基本的に大きく異なる。韓日両国語は膠着語であり、中国語は孤立語と分類されている。世界史の流れからして、韓国と日本の文明は比較的遅い時期になされた。独自の文字を持たなかった韓国人は中国人の発明した漢字を借用していた。日本もその点変りない。

古代の日本文字は万葉仮名と呼ばれたが、その内容は韓国古代の吏讀とよく似ている。完全に一致するものさえ少なくない。たとえば伊・加などは共通してイ・カと読んでいる。古代日本文化の多くが韓半島から伝わったが恐らく万葉文字も例外でなかったようだ。日本語と韓国語は言語構造が全く同じであったというのもおろか、ある時期においては言語そのものが同じであったと考えられるふしもある。

韓日両国民が中国文字を使用することで味わった不便さはほとんど同じ程度であったに違いない。この不便さを克服せんがため、日本人はいちはやく仮名を、韓国民はハングル文字を発明した。しかしその内容と発明過程は著しく対照的で

あった。

万葉仮名よりかな文字への変化過程については学者によっては少しずつ異なった意見もある。しかし大まかに見て、それらの共通点は次のようになる。

いわゆる単純化だ。この過程では万葉仮名の一部を切り落として仮名をつくり上げている。その種類も一つではない。別に思想などというものを大上段にふりかざさず、気楽にちよいちよいと削っている。

韓国のハングル創作の仕方は全く日本と異なり哲学めいたものを正面から打ち出している。

世宗二五年（一四四三）一二月に発布された「訓民正音」（ハングル）はデカルト的な意味の分析と総合の構造をもつ。ひいき目なしの科学的な創製物であった。しかし思想的背景は、日本人の目から見れば仰々しいと言えよう。

たとえば母音は天・地・人の三才を象形するものとして、天円地方の哲学を採用し、天は陽だから、それを表わすに○、地は陰にして□といった具合である。

ハングルの丸や四角があるのはこのためである。さらにすすんで、発声器官の各部位をかたどったといわれる二八個からなる国字（ハングル）の基本要素を五音・五時・五行に分類し、母音を陰陽に対応させてみるなど、当時の東洋思想・

中国古典の考えを採用して、陰陽五行説・易学の思想・大極説までを引き出して  
いる。これらの古い自然哲学を下敷きにして新しい発明を権威づけているのが特  
徴といえよう。いわば、韓国人には何等かの理由なしには新しいものが創造でき  
ないらしい。このような考え方は何もハングルに限らず韓国人の一般的傾向でも  
ある。

「かな」と「ハングル」はその後の日本語と韓国語の変遷の仕方に大きく影響し  
た。「奈良時代の仏典は朝鮮語で読まれていた」(田村圓澄『続日本古代史の謎』)  
といわれるくらい、古代に遡るほど両国語は近いものであった。

にもかかわらず両国語が今日のように一見別物に見られるようになったのはひ  
とえに文字の違いからくるものであったと言えよう。歴史過程にあった分岐点に  
おいてちょっとした違いはその後の両者の歴史の流れを完全に異なるものにした。

#### かなの創製に見られる日本的発想

私の知っている限りでもかなの種類は三もある。カタカナ、ひらかな、変態仮  
名などである。萬葉仮名の不便さを克服する為とはいえこうしたいくつものかな  
文字を創製した背景には日本人固有の思考法があるといえよう。普遍性なものよ

りもその場、その場での要請に応じて適宜なものを作り出し、一旦つくられたものはその後否定されることなく他のものと共存させる思考法だ。この思考は分野において流派を形成させる。数学にも関流、会田流をはじめ何種類に及ぶ流派があった。オランダ医学を導入した后にもいくつもの流派があった。

剣術、柔術あらゆる芸術、武芸にも流派がある。

元は萬葉仮名、元は中国数学、元はオランダ医学などは各々一つのものであっても一旦日本の文化世界に流入するとその何處か一部分を強調することていくつもの流派を立ててゆく。日本語の「立派」という言葉もこのような思想から生れたものではあるまいか？

私はわづか六個月の京都滞在中奇妙なことに気がついた。私の住居の近くに二軒の「キムラ」という食肉店がある。チェーン店にしては余りにも近い距離なので不思議に思った。お宅の店は向う側の店とどんな関係なのですか？と聞いたその答は全く意外なものであった。

「全く関係は御座居ません。私の店はカタカナの「キムラ」でステーキが専門であちらは平かなの「きむら」でホルモンが専門なのです。」

その後しばらくしてもう少し離れた場所にローマ字で「KIMURA」と看板

を立てた肉屋があることに気づいた。まだ何が専門なのかは聞いてはいないがそれなりの専門品目があるのではないか、又その内、漢字の木村という食肉店が出てくるような気がしてならない。

果して韓国人であったならこのような事がありうるかを考えて見た。

ソウルには洪陵という所に有名なカルビ店がある。洪陵カルビと言えばソウルの名物にも数えられる位である。ところがしばらくして少し離れた所に元祖洪陵カルビという看板をかけた店が現われた。もうしばらくすると本物洪陵カルビ店が出現し、その後、又、本物元祖洪陵カルビという長たらしい看板も出廻りはじめた。これは一つの肉屋、カルビ屋さんに関する話ではあるがあきらかな事は、このような思考がすべての分野に表われることだ。日本人は自分の流派を立てながらほんの僅かな獨自性を誇る、一方韓国人はより普遍なものを求めてゆくと見えよう。その為韓国には流派が形成されない。一方、正統性、原理主義の強い主張のある傾向を帯びてゆく。

### 和算の発想（単純化）

日本の和算が発達した理由は前にも少し述べたように中国特有の算木を捨てる

ことよってなされた。もともと中国の算学は方程式との関わりで発達し、その解き方には算木を利用した。

算木と易占いの卦木を同じように見立てていた傾向もあったようだ。そのためか韓国の算学者は一種の神秘思想に拘り算木に対して執着する度も強かった。日本の算学者は筆算、つまり記号化し、ごく自然に記号代数学をつくりあげる。一旦筆算化するとその便利なことは到底、算木の及ぶところではない。遂に和算特有の円理を生み出す。これは単純化の精神が成功したよい例である。

文字（かな）、算盤、和算などに見られる日本人の思考は根本的な発明ではない。それよりむしろ、一旦受け入れたものを改良するいわば改良工学的な思考である。今日、日本の経済を成長せしめた家電製品、半導体などの応用にはよくこの考え方が表れている。日本の和算研究家、三上義夫氏はこのことを「単純化を貴ぶ精神」と指摘している。まさにパソコン、テーブルコーダー、ウォークマンなどが単純化によってなされた。

単純化とはその対象が元来もっていた原則的な「考え」、思想などに拘らないことから可能である。例えば「加」からカがつくられてくるときには、加えるという意味に拘らないから可能なのだ。韓国人は日本人と同じ加をカと発音しながら



も、その意味に拘るためカナ文字を作ることができなかつたのだ。このような現象は文字に限らない。韓日間の文化の諸相が殆どこのように同じ程度の差を以て違っている。

再び強調する。即ちこれらの相違は、原型が異なるためであつた。

### 原型史観

世界各地では新しい民族紛争がおこり、それぞれが分裂・統一を目指している。分離するのも、統一するのもそれらは同じ民族同士で固まってゆこうとする民族原型の願いの表れである。国籍と、民族籍を一つにしようと必死になつて企図しているのだ。戦後創設された国際連合の加盟国数は六〇そこそこであつたが、今や一五〇カ国におよび、二一世紀までには二〇〇台に至るといふ推測もある。

このような世界情勢の中で真に未来を展望しうる方法は、在来の歴史観ではありえない。私はここで原型史観を主張する。振り返ってみると、今まで多くの歴史観が提出されてきた。古いところでは東洋の春秋史観、ツキジデスに代表されるギリシャの歴史観（ヒストリア）、ユダヤの神中心史観などがあり、近いところではマルクス史観、カーライルの英雄史観、トインビーの歴史観もある。

これらの歴史観は共通して歴史の展開には何か中心となるものがあることを主張する。それは天、法則性、神、経済力、英雄、抑圧された性、歴史意志などであり、最近「歴史の終焉」で一躍有名になったフクヤマはスモス（THYMOS、気品、自尊、自負）であると主張する。

これらすべての歴史家の主張する歴史の核は異なる。しかしよく見ると、すべての時期における歴史展開の原動力はほかならぬ、民族の集合的無意識、すなわち「原型」であることがわかる。

民族性は初めて民族が形成されたとき、その成員たちの共通した歴史体験を通じて形成された。そこには風土の特性や、民族融合の過程が大きく反映される。しかし一旦形成された民族の基本的な性格、すなわち原型は変わらない。時代条件の中で微妙な変化はするものの基本的な性格は変わらない。

言語と思考の間には深い関係がある。「言語は思想の化石」といわれるくらいである。民族語、民族原型は表裏一体となっているのだ。どの民族でも自身の民族語を固守しようとする。それは民族の原型であるからだ。民族とは原型を共有するものにあつまりなのである。民族の歴史にその原型が貫通するのは民族語が変わらないのと同じ理由による。人間の教育期間は長い。民族語はそこへ生まれた

ものを先祖代々父母を通じて次の世代にうつされ、民族社会がそれを受け継ぐ。それが民族にとっての「三つ子の魂百まで」となる。民族性には先着効果 (The effects of the first settlement) がある。いくら少数とはいえ一定の地域に先に到達したものが形成した文化の特性は、その後いくらほかの人種が多く来て一緒に住んでも、先住者を圧倒しないかぎり根源的には変わらない。

アメリカ語とアメリカ原型は初めて大陸に定着したものでたちによって作られた様に、日本列島でも同じことが弥生時代に起こった。以上のことを確認し、要約すると、「原型史観」の基本的な考え方は次のようなものである。

一、民族には各々独自の原型がある。それらの間に優劣はない。文化相対主義の立場でもある。

二、原型と時代条件がうまく適応すれば民族の繁栄をもたらし、その逆は衰退に至る。

三、民族の滅亡は原型の無自覚な変更と同質である。

四、新しい文化が外から入ると必ず原型に濾過され、民族独自の性格を表わす。

五、民族の品格、倫理性は原型がもっとも肯定的に昇華されたときに生まれる。

六、民族の歴史は「原型と時代的条件の緊張関係」の中で展開される。特に歴

史の繰り返し現象は変わらぬ原型と同じような時代的な状況の中で生まれる。

民族の歴史はその原型に基づいて展開されて来たのだ。

一方情報化がすすみ、国際化が加速される中で民族文化の普遍的傾向を帯びてくる。イデオロギーの終焉が現実となった今日、このように原型を中心とした歴史観が説得力をもって来る。各民族は自己の原型を下敷にして民主的な社会を作り出してゆくものと見られるいわゆる民族・民主々義 (ethnocracy) を目指すようになろう。

### 自然と人間

人間の生き方は、すべてが自然に適應する形でなされている科学・技術の水準・性格などがそれに対応する社会の構造を異にし、たとえそれら風土と社会構造の関係があからさまに見えないかもしれないが、自然の力があまりにも大きく気がついていないだけのことであって、自然のあり方にさからっては、そもそも人間は存在しようがない。人間の顔付きや体の構造が対称になっっているのもまた、安定感や美醜の標準があるのも、すべて地球の引力のためである。

特に自然の条件は基本単位の社会構造を基本的に規制する。

韓国と日本の基本的社会単位は表層的には多くの一致が見られる。しかしその内容は大きく異なる。韓半島と日本列島の自然条件の違いのためである。

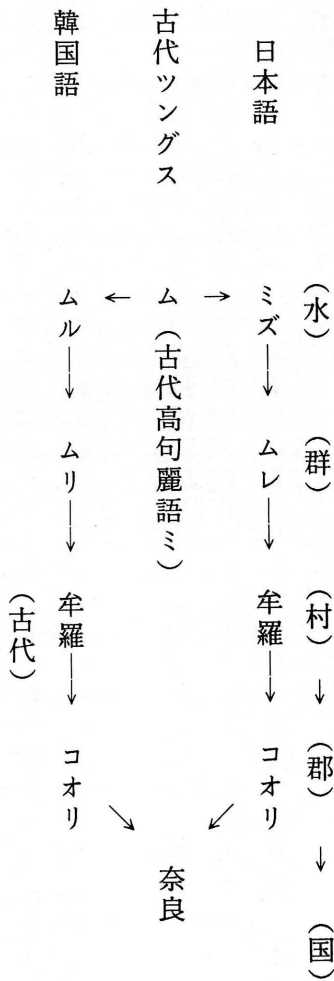
日本の村の中心には鎮守の森があり、村のはずれには寺、すなわち共同墓地がある。古い村の周囲にはよく環濠がつくられていた。環濠集落は水利施設を中心にして、作られた村ともいえよう。「ムル」と「ミズ」は同じツングス系統の言葉で「ム」から出た。

さて水である「ム」があるところに人々は集まり「ムレ」をなす。古代にはムレを牟礼と書いたが、今日では「群れ」となっている。韓国語では「群れ」をムリという。人々が「ムレ」ると「ムラ」ができる。古代には韓日共通してそれを牟羅と表わした。今の村だ。

韓国語でも古代にはムラ（マウル）は牟羅と表わした。中国の史書には「新羅では首都（慶州）を健牟羅という」との記録がある。健は韓国訓みでクンであり、それは大きいという意味である。つまり首都はクンムラ（健牟羅）「大きい村」であった。数年前、慶州の近くにある古い部落の入口に立てていたものと見られる碑石が発見された。そこには、その部落のことを明かに牟羅と表わしていた。

ムラが多くあつまると郡になる。日本語での訓みは「コオリ」だ。郡山、下郡、小郡などの地名でお馴染みだ。ところで韓国でも郡はコウルだ。もちろん、古代日本でもコオリをコウルといっていたに違いない。

郡（コオル）がいくつもあつまると国になる。国を韓国語では奈良という。ちょっと説明が長くなった。ここで以上の内容を整理しておこう。



奈良は韓国で国という意味をもつ。万葉集にある、

「あをによし 奈良の都」

とあるが、「奈良のみやこ」は国のみやこと解釈するのが自然である。しかしこれ

ほどまでに社会単位の名称が一致するにも拘らず日韓の原型は大きく違ふ。

### 文明と原型

村を中心とした社会の条件が日本原型をつくった。民族性とは民族の社会的性格であり、そのはじまりは最も小さな社会単位である村であった。原型が一旦、形成されると、その人々が他の地域に移住しても、それほど変わるものではない。はじめは九州・大和地方で形成された原型であっても、人々が日本列島に拡散していく中で、原型はほとんどそのまま置いていかれた。この事実はアメリカ大陸のできごとと比べてみるとわかりやすい。

米国の原型はヨーロッパのものを変形させたものであり、またアメリカ的なものになった。それは一旦米大陸の東部で形成されたが、人々の西進と共に開拓地は拡散してゆく。そのままほとんど全大陸に共通している。

日本の原型は弥生時代に作られた。おそらくそれがはじめて作られた場所は九州を中心とする日本列島の一部の地域にあったに違いない。

弥生革命と呼ばれるにふさわしい大変革であった。その内容は縄文時代とは全く異なるものであり、縄文文化の基盤から自生的に生まれるようななまぬるい変革内容ではない。あえてその例を世界史にとるとすれば、これまた米大陸のでき

ごとと相通ずる。

縄文はアメリカ・インディアン文化のようなものであり、そこへ先進のいわば白人文化に相当する稲作と金属文化は入り込んでできたものである。

このとき言語・人種、村（共同体）の作り方までが一切変わった。その後の日本文化に縄文の形跡が全くないとはいわない。今日のアメリカ文化、米語の中にもアメリカ・インディアンの影響はある。そのしかしアメリカ・インディアンと白人の民族原型は完全に異質である。

民族の原型は、主に社会的な価値基準による行動パターンを指す。一匹、二匹の蟻を見たところで、その生物的な構造は知れるかもしれないが、その組織的な行動パターンは知る由がないのと同様、単位としての民族にとって重要なのは、社会的な行動に表われるパターンなのである。E・H・カーの「国民性の違いはその社会性に認められる」というのはそのことである。

文明とは科学・技術など、主として人間の知的な成果を基にしてなされるものであり、それがいくらか幼稚なものであろうと、それらの前提なくしては文明は成立しえない。



一方科学・技術の基盤には、それらを作り出した人間の自然に対する解釈の仕方がある。つまり自然観である。それが科学・技術のあり方を決めてゆく。文明とはそれぞれ民族の持つ自然観によって推進された人間知の壮大なドラマの結果でもある。

西洋の科学・技術と東洋のそれとの違いは、いうまでもなく両者の持つ自然観の違いからくる。またその自然観そのものが、自然環境から生み出されているのだ。人々の目に映る自然は自然観を生み、また一旦形成された自然観は逆に目に映る自然のあり方を規制するようになる。そのため同じ風土を対象としながらも、自然観の違いで全く別物のように解釈されてくる。

各民族のもつ自然観はその原型の重要な部分だ。民族の先祖たちが待ち合わせた自分達の自然環境に対する平均的な見方が、民族の自然観でもあるのだ。一旦形成された民族の自然観は、原型の基礎となる。

同じアメリカ大陸の自然に対して、白人とアメリカ・インディアンのそれに対する解釈は全く違う。

白人達は、神の名によって徹底的に耕し管理すべき対象であった大陸の大地はアメリカ土着民にとっては偉大な慈悲深き母の皮膚でもあり肉でもあった。

東洋と西洋の自然観の相違は、それらの先祖が自分たちを取り巻く風土の中から育み出した。東洋人の自然観は西洋人のそれとは著しく対照的である。自然と人間は引きはなされるべきものでもなく、決して荒々しくもない。老荘の思想がよく引き合いに出されるところだが、自然への没入、あるいはその中での調和・一致を理想とする。

しかも、ここで重要なことは、同じ東洋文化圏とはいえ、地域によって大きく違うのだ。特に興味を引くのは、地理的に近く、人種的にほとんど変わらないのにも拘らず、日本人と韓国人の伝統科学・技術が大きく異なることである。そのくらい大きな自然観の差が、その根底にはあるのだ。

はじめて稲作を始めた日本列島において、人々はそれに適応する集団を作り、文化を持つようになった。収集・狩猟生活の集団と、定住して営む稲作社会の集団とは全然異なる価値観が必要であり、その後の長い間に引き続いた日本の稲作文化は、その原型を洗練させはしたが、変えることはなかった。それは日本語の根幹が変わらないと同じ理由による。

稲作は大小さまざまな技術を必要とする。もともとそれらの技術はその風土条件によく適応するように考案されたものであった。例えば雨水との密接な関係に

ついで、韓国の場合も日本の場合もほとんど同じだ。しかし、日本列島と韓半島の地勢、特に川の構造が異なる韓国のように主として集中豪雨的なものに対するのと日本の雨期によく見られるように相当長い間じわじわ降る雨に適應するのは、集団作業の仕方や技術のあり方が当然異なるろう。

近代以後、人々は徐々に自然や土地から離れはじめた。特に科学・技術は自然と人間の間の距離を広げさせる力でもある。しかし、それでも人間はやはり組織を持って生きてゆくことには変わりない。たとえ作業の対象が直接に土や自然に関わるものでなく、機械や電力であろうと、ある一定の組織を以て作業に臨む以上、集団の作り方、集団に対する個人の考え方には伝統的な思考法がそのままひきつがれている。つまり原型は変わらず新しい時代に貫通する。

### 日本と韓国の村の構造

日本の村の中心には共同体の神社があり、その周りには環濠あるいは小河川が流れ村のほずれには共同墓地があることはすでにのべた。

環濠は村人の共同作業によるものであり、その作業は共同体の神を戴いてなされる。神社が村の中心・墓地が村の外に置かれていることは、公と私の中で一つ

の選択が迫られると常に公(共同体)に忠実であることを象徴的に示している。日本の風土条件が稲作をするために要請したものである。稲作には共同作業の要求されるのは何処でも共通であるとはいえ、特に日本においては村人の強い連帯が必要であった。私を殺し、公(神・上)を優先するのだ。

一方韓国の農村は低い山すそに自然の流れを中心に構成された。韓国中どこに行っても低い山の見えない所はない。そのすそ野には必ず部落がある。山すその平地が狭く、流れの水量が少ないため部落は血縁中心につくられる。村の背にある山の陽当たりのよい場所には父祖の墓があり、村の前方に檀木すなはち共同体の神がある。いわば韓国の村落の中心は父祖の墓地であり、共同体の神(土地神)は二の次となっている。共同体の神と父祖の墓の位置は日本と韓国では反対といえる。

韓国人にとって最も大切なのは共同体の神よりも父祖の墓なのだ。父祖の死体は山に埋められ、大地の気を吸いとる。生存しているその子孫たちは骨肉を以て父祖のそれとつながる。すなわち生きている者達は埋もれた父祖の体を通じて大地の気を受け入れることが出来ると信じる。その為韓国人の死は単なる死ではなく土に戻ることである。事実韓国語の死は「トラガンダ」すなわち、「戻る」とい

う意味になる。このような考えのもとで韓国人は山勢、河川の流れなどを人為的に変造することを極度に避けて来た。

韓国人の正統主義(原理主義)的傾向は自然の理に忠実にしたがうという所から発し、すべての文化の諸相がその考えを表している。

一方に日本の共同体(神)中心主義は力のあるものへの服従となりそれが便宜優先の文化となっていた。

このような違いは風土に適応した村の構造にあると言えよう。

## 原型の形成

新大陸特にアメリカ大陸に植民が開始された時、ある一定の土地に村がつくられそれが発展して都市となってゆく。都市には夫々特有の文化パターンがある。それは人口の多少に関係なく最初にその土地に定着した人々のもった文化の特色、都市形成に際しての体験などを反映する。すなわち先着効果によるものである。それが原型の性格を決定した。日本の原型は彌生時代につくられた。はじめて日本列島に集落をつくった人々はその風土と開拓、征服の様式などに最も多くの影響を受けた原型を形成した。日本の風土の特徴はアニミズム的であり、いみじく

もその内容は『日本書紀』に天孫族の印象として記録されている。彌生文化は稲作を主体とするものであり稲作集落の性格、すなわち集団志向は日本の原型に内在する。

それは又征服、開拓を伴うものであった。

もともと農耕文化のはじまりは階級社会をつくり出す傾向がある（ジャン・ジャック・ルソー『人間不平等起源論』特に稲作にはその傾向が強く、『魏志倭人伝』には倭人の社会がきわめて階級性がきびしかったことをしのばせる内容が記されている）。

日本語の「かしこ」は漢字では賢、恐、謹、可畏などと書かれる。上||神を恐れ自分の分限を守って生きるのを「賢い」と見なす思想と言えよう。

日本の宗教の特性は「恐れ」にあるのもその為である。日本の神道は「崇（たたり）」、日本佛教は「地獄の思想」（梅原猛）、これらはすべて恐れ（かしこむ）意識を底に敷いたものである。

一方韓国の稲作は人為的な設備がすくなく水利灌漑なども降水を主として利用する天水田と呼ばれるものであった。人為よりも自然が尚ばれた。又韓半島の風土はシャーマン的な半乾燥的な要素が濃厚である。韓国人は一（自分）が天（神）

という思想をもつようになったのは偶然でない。韓国語の一、天、大などは共通して「ハン」という。韓国はすなわち「ハン」国とよむ。ハンの意識が韓国文化の基層にあるといえよう。

### 文化の諸相

韓算と和算の違いは各分野においても同じ程度に表われることは前に述べた。衣裳・遊戯・作法などは勿論、文学、芸術などにおいてもそうである。同じ時代風潮に対して民衆の反応の仕方もその原型を忠実に表はす。幕末の「おかげ参り」と朝鮮王朝末期の世直し思想（東学党）は同じ理由でなされた。即ち、専制政権の衰退と外圧に不安を感じた民衆の反応であった。しかし結末は全く異なる。又、「春香伝」と「金色夜叉」の世界。日本の相撲と韓国のスモウなど表皮は同じに見えてもその精神は全く異なる。それらの違いは原型が異なるためであった。

そのため文化の一分野だけを選んで比較しても、両者の違いから原型の違いを推測できよう。今日脚光を浴びている数学の一分野「フラクタル理論」における部分と全体の在り方を示す自己相似性とも、あるいは 仏教思想の「一即多」、  
「多即一」の現象ともいえよう。

文化は時代の軸を中心に展開されてゆく。国際化がすすむ中で各国の文化はいかに展開してゆくであろうか。特に自然破壊がすすみ風土との係わり合いが薄くなる条件のもとでは文化に一種のカオスの現象は避けられないであろう。原型の形成に最も大きな影響を与えた自然が破壊された後、そのまま原型をもつことは精神性に不協和音を発せずには治まらない。情報化の急速な発展はそれを加速化させることもありえよう。しかし、一方では在日韓国人の一部に見られる文化意識のように独自の原型を維持しながらも普遍性への希求が明確化してくることも指摘できよう。それは在米ユダヤ人の場合も同様であり、肯定的なコスモポリタンの型とも言えよう。今日人類に与えられたる課題は、人類文明のカオスかあるいは普遍化の道であろう。

二十一世紀は原型の時代であることは前にも述べた。各民族毎の原型が丁度モザイクの様な形であらわれる現象はより普遍的なものへ進展する以外、文化としての存在意義は失われてゆくであろう。その可能性は人類の原型を生んだ風土、自然の保存であることは言うまでもない。



\*\*\*発表を終えて\*\*\*

純粋数学から出発した私の知的遍歴は数学史、科学史、傳統思想、文明批評の分野にまで出入りするようになった。数学から文化人類学、文明史の境界を危うい足取りで歩んでいたといえる。特に傳統数学の比較研究は、日本・韓国の文化比較にまで興味をもたらざるを得なかった。

私としてはその都度、新らしい知的対象を得る度に興奮しその仕事を得た事を喜びを感じた。しかし「目の不自由な者が蛇をおそれず」のたとえそのものである。他人の目からすれば何んと身の程も知らずあつかましい事かと思われることも少なくなかった筈だ。私自身にうしろめたい思いが無かったわけではない。

日文研での六ヶ月はそのような私の思いに勇気を与えてくれた絶好の機会であった。ここでは優れた學究達が深い専門分野の造詣を基に学際研究を行っている。

私は未熟な自分の學問をすこし背伸びしながらここにその結果の一部を発表した。しかし斯かる學問の仕方にそれ程の誤ちがあるとは思っていない。むしろこの路線の上でより深く、より広く努めてゆくことに意義があろうと思う。これが私が日文研で得た最も貴重な信念である。

金 容雲



日文研フォーラム開催一覧

○は報告書既刊

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORI BEN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元 .4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元 .8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑱	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑲	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑳	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
㉑	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
㉒	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉓	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉔	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのペーバルス王伝説における主従関係の比較」
28	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
29	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
31	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
33	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラール・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウイトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・ 日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトローブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
45	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 外国人研究員) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄 九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン(米国ウェスリアン大学助教授・ 日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考 - 『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
48	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 ー技術移転をめぐるー」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間ー北條政子と宗教」



⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 -米国の日本美術コレクションの一例として-
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・来訪研究員) KIM Choon Mie 「近代日本知識人の思想と実践-有島武郎の場合-
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 -旧身分文化との関連を中心として-
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 -科挙制度をめぐって-
55	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語り - 平安朝文学の特質-
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・国際日本文化研究センター客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・ 日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・ 日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
63	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学, 1880 ~ 1930」

\*\*\*\*\*

発行日 1994年5月27日  
編集発行 国際日本文化研究センター  
京都市西京区御陵大枝山町3-2  
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター  
管理部・研究協力課

\*\*\*\*\*

1993 国際日本文化研究センター





■ 日時

1993年9月14日

午後2時～4時

■ 場所

国際交流基金 京都支部

